

新人類ストリート

野口津義夫

純文学的シリアスヒューマー

かつて「新人類」という言葉が流行った時期があった。この言葉に定義を与えるのは難しいが、大体次のようになると思う。一風変わっていて、何かをやってくれそうな、今までになかったパターンの個性を有していて、将来に期待を持ってそうな若者だが、年配者から見ると、必ずしも受け入れ難い要素を持った若者。

新人類ストーリー

はじめに

かつて、「新人類」という言葉が流行った時期があった。この言葉に定義を与えるのは難しいが、敢えて試みてみると、だいたい次のようになると思う。一風変わっていて、何かをやってくれそうなお、今までになかった。パターンの個性を有している、将来に期待を持ってそうなお若者だが、年配者から見ると、必ずしも受け入れがたい要素を持った若者、といった感じだろうか。

さて、この物語の中にも、こうした若者が登場するが、今頃なぜ、という疑問を懐く方もいるかもしれない。しかし、歴史は繰り返すという考え方に、別に賛成しているわけではないが、現代にも通じる要素を十分持っているとは確信しているからである。

確かに、「新人類」という言葉自体は現代では使われてはいない。しかし、この言葉の概念は、まだ死んではいないと思う。いや、むしろ、わたしがかつて予言した状態が、今いっそう顕著になっっているのである。

したがって、こういう成行きのは是非については今言及しないにしても、再び問題にせざるを得ない使命を感じた次第である。

もちろん、この物語は、こういう若者を描くことだけがテーマではない。だが、そういう若者を軸として、この物語の本質が展開していくのである。

では、私の純文学的シリアスヒューマナーを、どうかご期待ください。

十七年前の秋――。プラネタリウムの見慣れた菅野俊夫は、夕暮れの海岸通りでも寂しくなかった。午前中の講義を受講した後、四谷から僅か一時間あまりで横浜にやって来た俊夫は、既にマリーンシャトルに乗っていた。所要時間約九十分の、この湾内観光船は、その豪華なインテリアと多彩な設備とで、まさに二十一世紀の国際文化都市、横浜を象徴していた。

俊夫は十月半ばの、さわやかな港の風を頬に受けながら、オーブンデッキで、今自分が乗っている船のパンフレットを見ていた。ヨコハマ未来の風、風力二十一、マリーンシャトル。何とも言えない爽快感が漠然と持続した。その爽快感は、肌に心地よく吹き当たる海風の単なる生理的な快感なのか、それとも彼自身の内部から発する精神的な観念によるものかはわからなかった。だが、彼は、それをことさら追究しようとはしなかった。自分は確かに未来に向かって進んでいるんだという思いだけが、「現在の彼」を満足させていた。

現在の彼――。まさしく、そうかもしれない。彼は過去・現在・未来という、旧式な時間的図式など必要としなかった。必要としないというより、彼は考えてもいなかったのである。おそらく、彼にとって過去ほど価値のないものはなかったであろう。現在の自分は過去の蓄積であるという観念や、思い出として過去を保持したがる老人の悪癖など、俊夫はみじんも持っていなかった。彼にとつて、過去は不完全な自分の軽蔑すべき廃棄物でしかなかった。彼は現在だけを考えて。厳密に言う、現在における未来だけを考えた。

しかし、彼を冷酷な人間だと思つてはいけない。彼は、ただ過去に対して淡泊なだけであつた。つまり、過去に対して必要以上に感情を懐かないだけである。思うに、冷酷というのは、それにかかわつたことがある時に使用する概念ではなからうか。だから、彼のように、それを思つてもいない人間が、過去に未練などあるはずがあるうか。

船は山下埠頭を迂回し、南北の外防波堤灯台を抜けて進んで行つた。右手に本牧埠頭の数列の突堤が見える。そして、その最前列に発信所が見える。俊夫は観覧席に下りて、ビューシートの中央に座つた。

菅野俊夫は、現在S大学経済学部三年生である。将来に対する不安はない。それは自分の能力に自信があるからではない。最低の努力と偶然的な運とで、自分は自然に社会で成功するものと信じていたからだ。卒業して、ただの会社員になるという愚かなことを考えないで、自分で何かをやるうと決意さえすれば、お金はいくらでも入つてくる——、そう信じて彼は疑わなかつた。もちろん、あくどいことをするつもりはない。悪に至らない莫大なお金の持続的な入手だけが、自分の富裕な生活を支えてくれる——、彼はそのように考えていた。

本牧海釣公園、日産専用埠頭、そして国際埠頭が見える。彼は密かに持ちこんだ缶ビールを飲みながら、三ヶ月前の、ある夕方のことを思い出していた。それは前期の試験が近づいた七月下旬の、俊夫にとって一番忙しい日のことであつた。

午前と午後、二つずつ連続して講義を受けた後、彼は家庭教師のアルバイトがあつたので新

井葉師前まで行った。この日、寝坊して朝食を取らなかつた俊夫は、昼休みに学食で、そばを食べただけであつた。だから、彼は家庭教師が終つた後、自分のアパートに帰る前に夕食を済ませようと考えた。彼の住んでいる祖師ヶ谷大蔵に着くまで、とても待てなかつたのである。

彼は駅前の食堂に入つて中華丼を注文した。待っている間、空腹と疲労とで朦朧としていた俊夫の目に、テレビの映像が、ぼんやりと映つて見えた。何か有名人の対談のようだった。それは、わたしは戦後の荒廃した世の中から、これこれ、しかしかの努力をして、やつと実業家になつたとか、今と違つて、よい教材やカセットテープのなかつた時代に、貧しかったわたしは、こんなふうに涙ぐましい努力や工夫をして通訳になつたとかいふ、苦勞話をテーマにした番組であつた。俊夫は、現代の世において、ほとんど意味をなさないと思われる、この種の番組に興味深そうに見ている周りの人間の気が知れなかつた。しかし、やがて同胞が現れた。

学生風の若者が三人現れて、俊夫の前の席に座つた。俊夫はテレビがつまらなかつたので、ようやく運ばれてきた中華丼を食べながら、彼らの話を何気なく聞いていた。俊夫同様、どこかの大学の経済学部の学生らしい。すると、彼らの話の色つやから、俊夫は彼らに自分と同種のものを見いだした。

平凡な学生なら、覚え立ての難しい経済理論を自慢げにインテリぶつて披露し、経済の歴史的な推移や、各国の行政が関与した経済政策を並べ立てては知つたかぶりの批評を展開するところだが、彼らは違つていた。学生風の身なりにもかかわらず、既に実際に商売や実業に携わっているような感じがして、簡潔な意見にもスキがなかつた。そうすると、彼らは商才にたけた、かな

り狡賢い大人っぽい人間であると想像する人もいるかもしれない。しかし、そうではない。彼らは、やはり学生で、都市生活をエンジョイする快活な若者なのである。つまり、人間関係を犠牲にしてまで儲けようとは考えていない、けっこう正直な人間群である。彼らは学生らしく明るく、ある意味では子供っぽい。

だから、彼らは、二昔前の吝嗇で冷酷な損得だけを念頭に置いていた旧式な実業家とは違う。彼らは知っているのだ、そこまでしなくてもお金が入るといふことを――。彼らは俊夫同様、最低の努力と偶然的な運とで自然に成功する術を知っている。したがって、この一点で、彼らは難解な経済理論を展開しては喜んでいゝる貧乏学生とは違っている。彼らは人一倍儲けて、そのお金を自分たちのニュー・ライフのために惜しげなく消費する。

食事を終えた俊夫は、タバコを吸いながら寛いでいた。再び彼らの話が耳に入ってきた。

「あれ、おかしいな。どうして今時、こんなやるんだい？」

「教育テレビかな？」

「俺なんか、一週間で社長だぜ」

そう言って、彼らの一人がチャンネルを変えに立ち上がった。

船は扇島にさしかかった。日本鋼管の製鉄所が見える。ほろ酔い気分の俊夫は、心地よい気だるさのうちに身を任せた。そして口を突いて出てきた独り言に、もつともらしく頷いた。

「このぐらいの疲労度が最適なんだがなあ。あの時の疲れ様は、もうごめんだね。講義の多い日

に家庭教師が当たっていたし、前期の試験もあつたからなあ……」

彼は、何だか多忙が人間をダメにしているような気がした。

その時、一人の若い女がビューシートの中央に座っている俊夫のところにやって来て、小声で話しかけた。

「もしもし、お客様。申し訳ありませんが、船内は禁酒です」

俊夫は、とつさにビールの缶をパンフレットの下に隠して、しらばくれた。

「僕は何も飲んでませんよ」

「わたし、ちゃんと見てたんですよ。それに、何か一人で、ぶつぶつ言っていましたね。酔って他のお客様にご迷惑をかけてはいけませんので、どうかアルコール類はご遠慮ください」

「僕は別に人に迷惑なんか、かけてませんよ。確かに少しは飲みましたが」

俊夫は少し声を高くして反論した。すると、女は気色ばんで言った。

「お客様、ちよつと、こちらへいらしてください」

他の乗客の手前、俊夫は仕方なく彼女について行った。周りの客たちは、思わぬ場面に出くわした喜びで顔をほころばし、若い役者の方を名残惜しそうに振り返った。俊夫は観念して頭をかき、自分を見ている観客にビールの缶を指さし、愛嬌を振りまいてサービスした。これに同情した中年男は、俊夫の姿が見えなくなつてから、

「彼は、まだ若いよ」

と言いながら、ウイスキーの小瓶を懐から取り出して口をつけた。

不思議なことに、女は俊夫をオープンデッキにつれて行った。そして訝っている俊夫に、笑いをこらえながら言った。

「缶ビールを、まだ持つてるなら出しなさい」

俊夫は、もう一缶持っていたが、取り上げられるのが癪だったから、

「もうありませんよ」

と言つて、嘘をついた。女は吹き出して、

「喉が渴いたわ」

と言つた。俊夫は驚いて、女の顔を、まじまじと見た。

「わたしが飲むのよ。自分ばかり飲んで嫌だわ」

俊夫も吹き出した。

「はっはっは。してやられたね」

そう言つて、彼は缶ビールを取り出し、彼女にさし出した。

「あなたも飲んで。乾杯しましょう」

俊夫は栓を抜き、一口飲んで彼女に再びさし出した。そして言つた。

「君は誰だい？」

「女流作家よ」

彼女は可愛らしく気どつて、ビールを飲み始めた。

「女流作家って、君、まだ若いんだろう？」

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。